

**4月6日はゼミと世話人会を開催します**

当日はゼミ終了後に世話人会を開催します。会員の皆さんの参加も歓迎です。議題は下記の通りです。

記

- 1、2025年ゼミ・テーマと講演者
- 2、2025年以降の年会費について
- 3、ツアーについて他 以上。

**古気候学の概要**

—4月6日ゼミ紹介文：磐城 妙三郎会員記—

国連の事務総長グテーレス氏は「地球温暖化」を「地球沸騰化」と表現をエスカレートさせた。そもそも地球環境に警鐘をならしたのは民間のシンクタンクであるローマクラブが嚆矢である。ローマクラブの働きかけにより「気候変動に関する国際連合枠組条約」が1992年の国連総会で採択された。この条約の締約国会議がCOPと呼ばれている。2015年のCOP21（パリ協定）では、産業革命以前からの気温上昇を2℃以内に抑えることに合意した。この温暖化の元凶とされているのが大気中における温室効果ガスとされるCO<sub>2</sub>である。これは気候変動に関する政府間パネル（IPCC）による評価報告書に基づくものである。IPCCとは世界気象機関（WMO）及び国連環境計画（UNEP）が1988年に設立した政府間組織である。評価報告書には「気候モデル」というコンピューターシミュレーションによる予測結果が採用されている。CO<sub>2</sub>濃度が産業革命前の2倍になると気温が3℃上昇するというものだ。この気候モデルの開発者が2021年にノーベル物理学賞を受賞した真鍋淑郎氏だ。これまでは気候変動の主な原因は太陽活動であるとされてきた。太陽表面に観察される黒点の数の増減を太陽活動の指標として、黒点の数が増大すると温暖化、減少すると寒冷

化するというものだ。黒点の発見は17世紀初ガリレオによるが、継続的に観測が行われるようになるのは17世紀半ばになってからである。したがって黒点観測による気候変動の推移は約350年間で、その間マウンダー極小期（1645年～1715年）とダルトン極小期（1790年～1830年）が観測され、いずれも寒冷化が起きている。しかし太陽活動の変化が気候変動に関与するメカニズムはいまだ解明されていない。21世紀になってデンマークの物理学者ヘンリク・スベンスマルクがそのメカニズムに関する仮説を発表している。それは日傘効果と呼ばれ、温室効果に逆行する理論だ。「太陽とその惑星で構成される太陽圏は太陽の磁場によって、銀河からの宇宙線の進入を軽減させている。高エネルギーをもつ宇宙線は太陽圏に進入するが、地球の磁場もまた大気圏への進入を軽減させている。大気圏に進入した宇宙線は大気分子や元素を崩壊させ、エアロゾルを生成する。エアロゾルが核となって水蒸気を集め低層雲を発生させる。この低層雲が日傘効果を生み寒冷化を引き起こす。太陽活動が不活発なほど大気圏に進入する宇宙線が増大し、低層雲の発達をさらに高める」というものである。だが温室効果も日傘効果も気候変動に与える影響はせいぜい±2℃程度である。現在の間氷期は1万5千年以上続くが間氷期と氷期の気温差は極域では約15℃といわれている。この解明に挑戦したのが「古気候学」であった。シカゴ大学のハロルド・ユーリー教授とチェザーレ・エミリアーニ研究員やケンブリッジ大学のニコラス・シャックルトン教授らによる海底堆積物の酸素同位体比の分析によって1970年代には氷期と間氷期の気候変動が当時の海水の酸素同位体比で再現された。一方、セルビアの地球物理学者ミルティン・ミランコビッチ教授は地球の公転軌道、自転軸の傾斜および歳差運動の周期的変化によって、

太陽から受ける日射量の変化が氷期と間氷期を繰り返すという仮説を 1941 年に発表した。しかし戦時中であったため科学界でも忘れ去られていた。1970 年代になって米国ブラウン大学のジョン・インブリー教授らによって海底堆積物の過去 50 万年にわたる酸素同位体比の記録を周期解析したところ、地球の公転軌道の 10.6 万年周期、自転軸の傾斜変化の 4.3 万年周期、歳差運動の 2.4 万年周期が確認され、ミランコビッチの仮説がはじめて証明された。現在、ミランコビッチサイクルとして氷期と間氷期の気候変動の主たる要因として採用されている。古代史における未解明事項を過去の気候変動と関連付けることによって解決の一助になることを期待したい。ゼミでは古気候学の紹介と最新の気候変動に関する研究成果についてわかりやすく解説したい。以上。

## ゼミ会場と時間 13:15～16:50

- 1、全水道会館(水道橋駅)・中会議室(5階)
- 2、JR又は都営三田線水道橋駅下車徒歩2分
- 3、会場には12時30分から入場できます。

## 在原業平の和歌と色好み

— 『伊勢物語』のみやびの世界—

清野 敬三会員記

### ◇はじめに◇

平安初期の宮廷的ドン・ファンとして知られる在原業平は、平城天皇を祖父とする貴人です。外貌は上品で美丈夫、さらに恋の仲立ちをする和歌の才能にも特別恵まれていました。これでは女性にもてない訳がありません。

当時は藤原氏の勢力伸長期にあたり、他氏は圧迫されました。業平はその鬱積もあり公的な官職の方は手を抜き、あり余る余暇を専ら男女の交際「色好み」に向けました。

『伊勢物語』は、その業平をモデルに恋を核とした歌物語です。そこで詠われた和歌と行状は「みやび」と呼ばれ、『源氏物語』の「もののあはれ」とともに、平安朝文学の最高峰として人々の共感を呼んでいます。

### ◇生い立ちと人となり◇

業平の父は、平城天皇の第一皇子の阿保親王で、母は桓武天皇の皇女伊都内親王です。五男で右近衛

権中将なので、在<sup>まいる</sup>五中将とも呼ばれていました。

父母ともに皇親で血筋は高貴ですが、葉子の変(810)により平城上皇は敗北し、皇統は嵯峨天皇の子孫に移ってしまいました。業平の生れは天長2年(825)ですが、その翌年父の上表により臣籍降下し、兄の行平らと共に在原朝臣姓を名乗ることになります。

業平18歳の時、阿保親王の密告をきっかけに承和の変(842)が起きます。伴健岑と橘逸勢が謀略を企てたとする事件ですが、権力確立を図った藤原良房の陰謀と推定されています。変の直後、阿保親王は密告者としての後ろ暗さのうちに急死しました。死因は不明です。業平も権力の闇に感ずるところがあったと思われます。

業平の才能・人柄については、『三代実録』の卒伝に「体貌閑麗、放縦にして拘わらず、略<sup>はげ</sup>才学無し、善く倭歌を作る」とあります。姿態容貌は優雅で、性格は放縦つまり自由奔放だとしています。才学は、漢詩文の才能のことで、概して漢詩は得意ではなかったのでしょうか。しかし、倭歌つまり和歌の才能は高く評価されていたことが分かります。『古今和歌集』には30首が採択され、序文に「その心あまりて、ことばたらず」と評され、業平の情感は31文字に盛込むにはあまりにも豊か過ぎるとしています。また「六歌仙」「三十六歌仙」にも選ばれています。

業平は25歳の時、従五位下に叙されていますが、政治的敗者である平城上皇の子孫であり、公の官職には背を向けて専ら風雅の道、色好みの道に熱中していました。勝手気ままの「放縦不拘」です。

左兵衛権佐・左近衛権少将の武官をつとめた後、41歳、当時としては初老の齢になってようやく右馬頭になりました。陽成朝に入り元慶元年(877)53歳で従四位上・右近衛権中将に叙任され、元慶3年には、要職である蔵人頭に任ぜられました。これには、皇太夫人藤原高子の推しがあったようです。しかし、翌元慶4年(880)56歳で亡くなりました。最終の官途は右近衛権中将どまりでした。哀傷の歌を遺しています。

つひにゆく 道とはかねて聞きしかど

きのふけふとは おもはざりしを

### ◇平安貴族の男女交際◇

平安時代の貴族は、基本的には通い婚です。男性

はあちこちの女性を訪ねます。そして寝所に忍び込み、いきなり共寝をして、夜明け前に帰るのが交際の仕方でした。しかし男性が女性の屋敷に入るのには、それなりの手順が必要です。まず、姫君の下女や女房に予め接触し、その手引きがないと中へ入れません。そのために従者同士が関係を持つこともあったようです。また、手引きにより一旦寝所に入れば、姫君たる者大声を上げて抗うなどの、はしたないことはいたしません。

平安時代、姫君や女官は裳唐衣もからぎぬを着ていました。単衣ひとえを12枚重ねる十二単ひつとえのことです。当時は寝間着がなかったので、夜は十二単を布団代わりにそのまま寝ることもあったようです。共寝でそれを一枚ずつ脱がせるのは、気分の高揚にもなりますが面倒でもあります。上手くやれば、十二単から身一つだけのスリと取り出せたそうで、残った衣を「裳抜きの殻」と呼んだそうです。これは『小説伊勢物語業平』の著者高樹のぶ子氏が「学士会」で行った講演でのjokeです。

一人の女性に通うことが三日続きますと、三日夜餅もちを食べ露ところあらわし躰みかよのの儀式をして、晴れて世間に向けて婚姻が成立します。ただし、婚姻が成立しても、男性が他の女性のところに通わない保証はなく、一方、女性も他の男性を受け容れても罪にはなりません。焼きもち焼くでしょうが、当時は価値観や社会制度が異なります。現代の倫理観で物事を判断すると間違えます。

『伊勢物語』には、「東下りあづま」の段があります。貴人が各地の豪族の家に泊まりますと、そのつど寝所に豪族の娘が送り込まれます。もし娘が都の貴公子の血を引く子を産めば、これは大変な名誉のことでありました。このため藤原姓が各地に散ばり、さらに、佐藤さん・後藤さん・加藤さん等々、藤のつく苗字の家が全国で最大多数となったのもその影響でしょう。

### ◇二条の後藤原高子との忍ぶ恋◇

『伊勢物語』は在原業平をモデルにして、数々の女性との恋物語が語られていますが、とりわけ印象の深い二条の後藤原高子たかひこと伊勢斎宮恬子やすこ内親王との禁断の恋を取り上げてみたいと思います。

高子は、時の権力者藤原基経ききよの妹で、将来天皇の后にしようと大切に育てていた「后がね」です。高子は後に国母こくもとなりますが、まだ雲上に上がらぬ頃

のことです。仁明天皇の後、順子邸の西の対たいに住んでいる所へ、業平が訪ねましたが会ってもらえませんでした。そこで「ひじき藻」を添えて歌を贈りました。

思ひあらば むぐらの宿に 寝もしなむ  
ひじきものには 袖をしつつも

(私を思う心がおありなら、荒れた家でも満足です。袖を重ね引き敷いて、共寝をいたしましょう。) 現代からみると随分と露骨な歌ですね。その後も度々訪ねますが、高子は他所に姿を隠してしまいました。

年を越して梅の花ざかりの頃、業平は去年のことを恋しく思い、さめざめと泣いて歌にしました。有名な歌です。

月やあらぬ 春やむかしの 春ならぬ  
わが身ひとつは もとの身にして

何度も歌を贈るうちに、ようやく夜更けに会うことが許されます。高子も、もともと業平を憎からず思っていました。わざと拒んだのは、男心をそそる昔からの女性のテクニックです。二人の愛は燃え上がりました。しかし、兄の基経らにとって高子は「后がね」の掌中の玉です。業平が通い路としていた築地の崩れに関守を置き、守りを固めました。

嵐の夜、ついに業平は高子を郊外の芥河あかたがわまで連れ出しました。雨を避けるため無人の小屋に高子を入れ、入口で見張りをしていると、高子の姿が見えません。鬼が来て一口で食ってしまったようです。この鬼は、基経や國経が取返しに来たことを意味します。高子は手の届かぬところに行ってしまう悲恋に終わります。

傷心の業平は東下りの旅に出ました。「かきつばた」を読み込んだ「唐衣からころも きつつなれにし…」や、スカイツリーがある言問橋こととひの由来になった「名にし負はば いざ言問はむ…」など、お馴染みの歌を詠んでいます。

その後、高子は基経らの思惑どおり清和天皇の女御となり、貞明親王さだあきら(陽成天皇)を生みます。貞明が皇太子に立てられ、高子が春宮とうぐうの御息所みやすんどころと呼ばれるようになった頃業平と再会し、また交際が始まります。業平は歌会で高子に会い、「竜田川の紅葉が唐紅のくくり染めのように美しい」と詠んでいます。

ちはやぶる 神世も聞かず 竜田川  
唐紅からくれなひに 水くくるとは

余談で恐縮ですが、僕は昔、姉たちとカルタ取りを競っていた頃、「くくり染め」とは知らず、読み

役の母の読み癖のまま「水潜る」とばかり覚え込んでいました。最近になって知ったのは「水括る」と解釈したのは賀茂真淵であって、藤原定家は「水潜る」と解していたとのことで、「くぐる」もまんざら間違いではなかったと再確認しました。なお、落語の「千早振る」でも、知ったかぶりのご隠居さんの珍解釈は「落ちぶれた遊女千早が身を投じ、水をくぐった」です。

#### ◇伊勢齋宮恬子内親王との禁断の恋◇

恬子内親王は、文徳天皇の皇女です。同母の兄惟喬親王は第一皇子でしたが母が紀氏のため、藤原良房の娘明子所生の第四皇子惟仁親王が立太子しました。しかも、惟仁が清和天皇として即位すると、恬子は伊勢の齋宮に指名されてしまいました。齋宮は基本的には生涯独身で、天皇が代替わりするまで都に戻れません。業平の妻の父は紀有常で、惟喬・恬子の母静子とは兄妹です。業平は惟喬とは親しい仲であり、恬子も幼い頃より可愛らしい妹のように思っており、恋にも通じる感情をもっていました。

そうした折、業平は勅命により「狩の使」として伊勢に赴くことになりました。齋宮の恬子は、母静子からの指示もあり、心を込めて業平を歓待しました。滞在二日目の夜、業平は誘いをかけ、齋宮もそれに応えたいのに、人目が多くてままなりません。

業平は眠れぬまま一人、部屋でおぼろ月を見ていると、童女の案内で齋宮が来てくれました。業平はうれしくて、自分の寝所に連れて入り、子一つから丑三つまで3時間ほど一緒に過ごしました。言葉は少なく、あまり語り会わないうちに、齋宮は帰ってしまいました。悲しくて寝ずにいると、明け方、歌が贈られてきました。

君や乗し 我や行きけむ おもほえず  
夢かうつつか 寝てかさめてか

(貴方が来て下さったのか、私が伺ったのか、よく分かりません。これは全て夢だったのでしょうか。) 女性の方から男性の寝所を訪れたことに、消え入りたいような恥じらいが感じられます。

かきくらす 心の闇に まどひにき  
夢うつつとは 今宵さだめよ

(私の心は真っ暗になり判別がつきません。今晚おいでになってお決め下さい。) 業平から「今一度お逢いして決めましょう」と誘っています。

翌日、狩に出ましたが、今晚のことを思い気もそ

ぞろです。ところが伊勢国守らが来て酒宴が一晩中続き、とても逢う時間がありません。夜明け早々には帰国せざるを得ません。

この男子禁制の聖域での伊勢の齋宮との情事は、業平の色好みのハイライトとも言えるもので、『伊勢物語』の命名の由来となったとされています。

後日談もあります。密通の結果生まれたのが高階師尚で、高階氏はこの不始末から伊勢参詣はしないそうです。さらに御堂関白道長の時代、高階氏出身の皇后定子(清少納言が仕えた)の皇子敦康が、中宮彰子(紫式部が仕えた)の皇子敦成に皇位争いで敗れたのも、このことが影響しているとの話もあります。

#### ◇おわりに◇

業平は、藤原氏の権勢に押されて政治的には傍流に追いやられ、その失意から色好みとその媒介の和歌に没頭し、放縦の生活に奔りました。生涯を通じて宮廷の世界に執着しながら参議にもなれず、王朝の世俗の中で多恨のまま生を終え、その辞世の歌にも至って俗物的な未練を残しているという見方があります。

一方、業平の生涯は反藤原の政治活動ではなく、反政治的なのであり、政治に対する文化の優位を示したものであるとする見方もあります。唐木順三氏は、「身をえうなき者に思ひなして」憂き世から離れることによって開かれた心の世界を歌にしたとしています。また、「業平の色好みは、心に恋わびはあっても、好色のすきはなし。・・・ここには一種のきよらかなあはれがある。」と言っています(『無用者の系譜』筑摩書房)。

業平を、色好みの典型とみるよりも、和歌復興の先駆として評価すべきでありましょう。時世を慨し一抹の未練を残したとしても、それが歌に陰影を添え、生涯を通じて充分満足する人生を送ったとみるべきだと思います。了

### 次回5月4日ゼミ・テーマ

「古代の天皇や権力者が入った温泉の泉質とは」

—記紀や風土記に見られる温泉—

相澤 省一 会員

### 9月ゼミの日に変更のお知らせ

9月ゼミは会場の都合で、7日(土)から8日(日)に変更になりました。以上。